

編集後記

■編集委員

委員長

藤 田 郁 代

副委員長

立 石 雅 子

石 田 宏 代

今 井 智 子

内 田 信 也

宇 野 彰 準

勝 木 美 子

熊 倉 勇 子

倉 内 紀 子

小 林 範 子

城 間 将 江

鈴 木 恵 子

関 啓 子

玉 井 ふ み

深 浦 順 一

矢 守 麻 奈

昨年末から今年の初めにかけて例年になく厳しい寒さが続きましたが、季節は巡り、日の光や草木の芽吹きに春の兆しを感じられるようになってきました。本日(2月19日)は言語聴覚士国家試験が実施されます。4月には難関を突破し、晴れて言語聴覚士の免許を手にした新人たちが全国各地の現場に入っていくこととなります。少子高齢化が進行する中で、言語聴覚療法を取り巻く環境は急激に変化していますが、「患者さんを中心に論拠に基づき最善の言語聴覚療法を提供する」という臨床理念は普遍的で、新しく現場に入った方々が環境に柔軟に適応しつつ、理念を具現する人材に育っていただきたいと思います。

さて、本号では「言語聴覚士養成教育の質の向上をめざして」が特集となっていますが、これは昨年の第11回日本言語聴覚学会のシンポジウムの講演をまとめたものです。藤田論文では教育の質の向上にはモデル・コア・カリキュラムの作成が重要であることが指摘され、大西論文では臨床実習の改善に向けた新しい取り組みが解説されています。小山論文では看護教育の現状と課題が紹介され、三浦論文では人材養成の核となる理念が解説されています。言語聴覚士養成においては量(ST数)の充実を着々と進んできましたが、質のさらなる充実が大きな課題になっています。これまで教育の質の充実は各養成校の独自努力に任されていたが、養成教育が本格的に始まってから十数年が経過した現在、分野全体での取り組みが期待されており、本特集は時宜を得たものと思います。

「原著」論文では原発性進行性失語例および線条体黒質変性症の病態像と経過について興味深い知見が報告されており、「短報」と「現場、最前線」では教育および臨床における新しい取り組みが紹介されています。

今号も、本分野の幅広さを反映した多岐にわたる研究成果をお届けできたと思います。

(藤田郁代)

言語聴覚研究(第8巻 第1号)2011年3月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：一般社団法人 日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0022 東京都新宿区新宿 2-5-16 霞ビル 8階

(☎03-6412-9853 FAX 03-6412-9854) <http://www.jaslht.or.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Kasumi-Build. #801, 2-5-16 Shinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0022, Japan

©2011, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)